

『魂と医療—救える命があればどこへでも』③

A M D A 代表

菅波 茂

二月二十六日、求道会創立六十周年記念男子壮年信徒大会が開催され、『魂と医療—救える命があればどこへでも』の講題で、A M D A 代表の菅波茂氏が記念講演を行った。A M D A (特定非営利活動法人アムダ)は、スリランカやコンボで敵味方の分け隔てなく医療活動を行い、また、世界各地で発生する大地震や台風などの自然災害においても、早急に救援チームを派遣するなど、わが国を代表する国際的NGOとして国連からも高い評価を受けている。本誌では、三回に分けて、菅波茂氏の記念講演を紹介してきた。



菅波茂先生  
菅波茂という、まだ海のものとも山のものとも判らないひとりの医学生が示した「アジアのために何かしたい」という意欲に対して機会を与えるか与えないかの権限は、その時の学長代行であった谷口澄夫先生が持っておられた訳ですが、私は一介の学生ですから実力も判りません。けれども、その時に谷口先生が判子を擦してくだ

さったことが私の原体験となり、現在のA M D Aの活動のきっかけになっていのです。すなわち、意欲と能力があれば、チャンスさえ得られれば結果が出せるということ……。  
では、意欲があることは判るけれども、能力の有無が判らない時はどうすべきでしょうか？ その場合、私は一度チャンスを与えてみて、結果を見てみるんです。その結果がプラスと出れば、良かった訳ですし、逆に無かった場合は、新たに考え直せばよいのです。むしろ問題なのは、意欲がないのに能力だけがあるケースですが、この場合はどうすると思

ますか？ 私は、チャンスを与える必要はないと思います。何故なら、そういった人間にチャンスを与えることは非常に危険だったり、無駄だったりするからです。

実はこの問題は、現在の高等教育機関における問題とも照らし合わせる事ができます。せっかく大学に入学しても途中で辞めてしまう学生が沢山いますが、彼らは意欲がないにもかかわらず、能力があるため大学に入ってきます。しかし、彼らは能力を磨く場を得て、チャンスを与えられているにもかかわらず、(自己実現のための)辛抱が続かず、大学を辞めてしまうという結果に終わっています。意欲と能力と機会と結果という四つの言葉は、フェアネス(公平性)において貴重な用語ですけれども、現代の日本で最も問題になっているのは何か？ と申しますと、「機会と結果の公平性」の問題よりも、この「意欲の欠如」こそが問題だと思えます。

▼何故、人間は他人を助けるのか？

それでは何故、意欲の欠如が日本で問題になっているのでしょうか？ その答えのひとつとして、宗教というものがタブー視されてきたことが挙げられます。私は、このところが一番重要だと思えます。今日、私が皆さんとお話をさせてもらえるのは、たまたま私が三宅善信先生の知り合いだったことがきっかけですが、このような機会を通して、私は泉尾

教会の信者として熱心に社会活動をされている皆さんのことを知り、理解できるのですが、世間一般の人は、なかなかそうはいきません。信仰あるいは宗教団体というものと接点を持つチャンスが日常的にないためです。

しかし、「人間は何故生きなければならぬのか?」、「どうして人を助けなければいけないのか?」といった疑問に対する潜在意識を人間はどうやって形成していくのかと問うた時、これは倫理・道徳の問題ですから、「宗教」が大きな役割を果たしていると思えます。にもかかわらず、そういった知識や感覚を現在の日本の学校教育で学ぶ機会には提供されませんし、家庭の中でさえ、そういったチャンスがありません。ですから、人間が生まれてから死ぬまでの間、「何処で何のために自分は生きるのか?」あるいは「どうして人を助けなければいけないのか?」といった話を聞く習慣がないのが現実です。

現在、世界に四千万人から五千万人いると言われている難民のお世話を一手に引き受けている国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)という国連機関があります。一昨年(二〇〇四年)の九月三十日、この国連難民高等弁務官事務所に寄付をしている国の支援者会議が行われる前に、UNHCRと組んで実際に難民のお世話をしているNGOの会議があったのですが、私もその会議に日本のNGOの代表として参加しまし

た。これはAMDAの活動を紹介する貴重な機会ですから、私も「良いプレゼンテーションをしよう」と思い、一生懸命勉強をして準備をして行ったのですけれども、前日になって急に国連難民高等弁務官事務所の方から「テーマを変えてくれ」と依頼されたのです。それを聞いた時は一瞬、頭が真っ白になりましたよ。と申しますのも、私は留学の経験がありませんから、それほど流暢に英語が喋れるほうでもありませんし、何しろプレゼンテーションをやるために発表内容を吟味し、一生懸命作ってきたものでしたから、いきなり「一晩で変えてくれ」と言われても非常に困る訳です。

何故、内容を変えて欲しいのか？ その理由を国連の方がこう説明してくれました。「国連難民高等弁務官と欧米のNGOとの間は、コミュニケーションが非常によくできています。互いの考え方がよく解る。しかし、アジアのNGO、AMDAは日本の岡山に本部がありますから、アジアのNGOになります」とのコミュニケーションが未だ十分ではない。だから、何故アジアのNGOが人を助けるのか？そこを説明して欲しい」と……。こういう問題が宿題として与えられました。私なりに一晩考えまして、当日「何故、日本人、あるいは、アジアの人間は人を助けるのか？」というテーマで私話をさせていただきましたが、この話の原点は、阪神大震災の時に遡ります。一九九五年一月十七日の震

災を期に、「ボランティア元年」などと言われましたけれども、あの時の現象をどう説明するのか？ ということへと繋がります。

私はアジアのNGOの動機を「私たち日本人を含めて、アジアの人は、友だちのために助けに行くのだ」そして、「ハピネスとアンハピネス、つまり、良いことも悪いことも共有するのが友だちだが、そんな友だちが困った時、彼らを助けに行くのは友だちの責務(レスポンスビリティ)なんだ」と説明しました。

通常、人は他人のトラブルには巻き込まれないように避けるのが普通ですが、何故わざわざトラブルをシェア(共有)しようとするのでしょうか？ それは、トラブルを解決するプロセス(過程)において、相手の中に自分にはない素晴らしいものを発見した時、相手に対する「尊敬」の念が湧き起こります。そして、どんなにトラブルが深刻で激しいものになっても、決して相手が逃げないことが判った時、今度は「信頼」という気持ちが出てきます。この「尊敬」と「信頼」という気持ちが出て初めて、アジアの歴史の中において、多宗教・多民族・多文化といった、ものの方や考え方が異なる人たちが一緒にやっていけると思うのです。

「だから、私たちは友だちが困難に陥った時に動くのです」と、このような説明をしたら、スーダンやイラクなど、

実際に紛争のある地域のNGOから「では、どうすればフレンドシップは手に入るのか？ パートナーシップは手に入るのか？」という質問が返ってきました。私とその質問に「フレンドシップというものは、たつた今からでも私とあなたの間に築けます。しかし、困難を共にするパートナーシップを築きたいというのであれば気を付けて下さいよ。もしも途中であなたが逃げ出すようなことがあったら、私はあなたを軽蔑します。そうすると、せつかくのフレンドシップでさえ、バラバラになってしまいますからね」と答えました。

このような発表をしたら、後で国連難民高等弁務官事務所の方が「このような本音の会議は初めてだった。是非、来年もまた来て欲しい」と言ってくれました。ですから、「ただ黙って相手を助ければ良い」という訳ではないんですね。何故、私は人を助けるのか？ また、助けられるほうも、何故この人が私を助けるのか？ という問いにどのような答えを出せるかが非常に重要な問題になってきます。

### ▼困った時はお互い様

今回、私共、日本人のAMDAのチームがフィリピン人の医師たちと共にレイテ島に行った時の一番の問題点は、やはり「いくら外国でその人が医者だからといっても」フィリピンの医師免許が無い人は、フィリピン国内では医療活動に従

事してはいけない」という点だったのですが、ここを「どうクリアするか？」と、日本チームと現地スタッフが話し合った結果を受けて、私は南レイテ医師会の会長であるマトウ先生(Dr.Mato)に電話をかけました。「マトウ先生、私たち日本人はフィリピンの人たちに対して、非常にシンパシー(共感)を感じていることがあるんです。それは一九九五年一月十七日に阪神大震災が起こった時、フィリピンのラモス大統領から「自らの一カ月分の給料を神戸の被災者のために使ってください」との発表があったのですが、マトウ先生は覚えていませんか？」と尋ねますと、彼もそのことを記憶していました。私は、「あのラモス大統領の『自分の給料を被災者のために使って欲しい』との意向が日本の新聞に発表された時、どれほど日本人がフィリピンの人たちを身近に感じ、有り難いと感じたことか……。以前に増して、ぐっと心理的な距離が縮まったのです。そして、私自身もあの時のことを忘れていません」と言い、「今度は、フィリピンの人たちが大変な目に遭っていることを知り、私たちはすぐに医療チームをレイテ島に送りました。私たちは、あの阪神大震災の時にラモス大統領が一カ月分の給料を寄付して下さったことに対する大きな喜びと感動への感謝の気持ちとして、レイテ島の人々に医療活動を行いたいんです」と、何故レイテ島の人々を助けたいのかをまず伝えました。そして、「どうか、あなたの医師免許と南レ

イテ医師会の権威のもとで、私たちA M D Aのチームの医療活動を認めてやって欲しい」と、このように頼みましたら、マトウ先生は「解りました」と私の要請を請け負って下さいました。彼は、病院を持ち非常に多忙な身であるにも関わらず、ずっと私たちのチームに付いて、今日も一緒に活動してくれているはずで。

これはひとつの例に過ぎませんが、私たちアジアの人間は、「何故あなたを助けるのか？」という問いに対して、「困ったときはお互い様」という感覚を持っています。「あなたが困っている時は私が助けに行きます。けれども、私が困った時には助けに来て下さいよ」と……。こういった中で、私たちA M D Aはお互いに尊敬と信頼というものを重ねていつているのです。また、そういったフィリピン人や日本人といった、民族だとか職業、男女とかいうものを超えて、お互いやっていけるということを積み重ね、示していくのが私たちA M D Aのやり方なのです。

しかし、これは裏返して言えば、逆に「アジアはこういうやり方でもって、お互いのものの方、考え方が違っているも、共存共栄していくための地道な努力をしなければならぬ」ということです。私たちA M D Aは、「救える命があればどこまでも行きますよ」と謳っています。「それは何故なのか？」と問われたら、この「困った時はお互い様」という相

互扶助の精神で行っている訳です。だから、この活動は私たち日本人医師だけでやるのではなく、アジア各国のドクターにも参加してもらっています。

#### ▼泉尾教会とA M D Aが手を取り合って……

私は、今から三十五年前に谷口澄夫というひとりの人間から「意欲と能力があればチャンスを与え、そして実現させることがフェアだ」と教わり、そして「それができない時を差別と呼ぶのだ」というひとつの大きな教訓を頂きましたが、おそらく皆様も、かつて教会堂の建設途中にジェーン台風の高潮による水害に見舞われた時に、信者さんではない付近の人も分け隔てなく一生懸命受け入れたという、初代三宅歳雄先生の「人を助ける」という精神の原点から大きな教訓を得て、それを脈々と受け継いでおられるのではないかと私は解釈しております。

今年の一月に非常に嬉しいことがありました。皆様よくご存知のW C R P（世界宗教者平和会議）という世界的なNGOがあります。これは三宅歳雄先生と立正佼成会の庭野日敏先生らが「世界の平和のために頑張ろう」と、宗教者同士がそれぞれの宗教の垣根を超えて創られた組織ですが、共に一生懸命活動された結果、国連の経済社会理事會における総合諮問資格をすいぶん以前に取られました。実は、A M D Aも

これと同様の総合諮問資格が今年の一月に内定しました。A M D Aにとって今年に設立して二十二年、私個人がこのような活動を始めて三十五年目に当たりますが、経済社会理事會のメンバー五十四カ国の異議がなければ、この五月に正式に認められます。泉尾教会の三宅歳雄先生たちが一生懸命創られた、宗教を超えた宗教者による世界平和のための会議と、私たちA M D Aが国連内で同じ資格でもって、これからの世界平和に向けて頑張っている状況になりつつあることが、私としては本当に嬉しいことです。

そういった状況の中、泉尾教会では御布教八十年に際して『人を助けよ 燃えるいのちで』というスローガンを出されていますが、これは私たちA M D Aの『救える命があればどこへでも』というスローガンに非常に近いと思います。三宅善信先生とは、常日頃から様々な場面で助けていただくなどお付き合いがありますが、今後は、皆様をはじめとする泉尾教会、A M D A、そして三宅歳雄先生が創られたW C R Pのネットワークでもって、私たちを必要としてくれる世界の人のためのために一緒に頑張っていくことができれば、私たちA M D Aも非常に誇りに思います。

この度は、求道会創立六十周年の男子壮年信徒大会ということですが、既に皆様は社会のそれぞれの活躍の場において、存在感と影響力を持ち、日々後進育成に当たっておられ

ることと思いますが、その役目に留まらず、『人を助けよ 燃えるいのちで』の精神で日々修行されています。私は、この「燃えるいのち」とは、日頃の信仰生活によって練り上げられるものであると思いますが、ここにお集まりの「壮年」と呼ばれる皆様は、初代の三宅歳雄先生から深くこの精神を受け継いでおられる方々だと思います。そういった意味で、われわれA M D Aと活動分野は違っていますが、私たちが必要としてくれる世界の人のために、一緒に手を組んで前に向かって行けるのではないかと、思いますし、また、そのチャンスがあれば、私たちにとっても非常に嬉しいことです。もちろん、逆に「A M D Aに対する理解を深めていただき、様々な意味でご指導いただければ」とも思っております。

本日は、求道会創立六十周年に対するお祝いを述べさせていたたくと共に、泉尾教会の御布教八十年を迎えるに当たってのスローガン『人を助けよ 燃えるいのちで』に、私たちA M D Aの『救える命があればどこへでも』というスローガンを合わせて、「これまで以上にともっと一緒に活動させていただきたい」とお願いをさせていただきたく泉尾教会に参りました。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。今日はご清聴有難うございました。